



意識の外側 2015 大理石 可変

意識の外側とは、意識現象（実在）との対立性の無さ、という意味合いで、使い始めた造語である。

難解さを帯びた主題や作風に、気を当てられて、後ずさりし、「芸術家の考えていることは分からない」と距離を置く人は多いと思われる。正直に言えば、この文言はもう飽きるぐらいに聞き慣れている。おそらく、僕に限られるものでもなく、いわゆる芸術家にとって常套句のようなものであるように思う。

唐突だけれども、ここで、一つそぶいておきたい。僕の作品についての解釈は「分からない」で概ね当たっている。冗談のように聞こえると思うが、僕はそういった「分からない距離」を表現する作者である。僕にとって、「分からなさ」とは違和とした事実に関こえるに過ぎない。ただ、それがどのような類の分からなさかと対峙するのか、ということに関心がある。確かにこれは、個々の知識や経験を試すような試みではあるのだけれども、決していわずらに優劣を求めることに狙いがあるわけではない。ただただ、人との違い（個性）を目撃することに目的があるのである。

単純に申せば、その違いを、あるいは真実を、縦に求めるか、それとも横に求めるかの、合点の違いである。ことアートの領域において、この縦横を、一神論か多神論（無神論）のどちらを考究の出発点とするのか、と見立ててみると面白い。おかしな言い方ではあるのだけれども、身体と精神が一つしかないのが西欧近代アートの典型である。故にそこから見出される真理もまた一つに限られようとする。たとえ一つに限られるとしても、身体を主軸に置いているのだから、導かれる真理は多様性を帯びる可能性はある。私が他者と全く同じ経験をすることができないという事実、お互いにとって不可知な記憶を認められることができるのであれば、はじめて真理は、結局のところ多様性を獲得することに成功する。なお、ここで述べる不可知、分からなさ、あるいは多様性とは、予めの専門的知識の所有が原因するのではない。それはむしろ未だ経験されてはいない事実こそを指すのである。

私（主体、物質、身体）から考えるか、それとも他者（客体、精神、もの）から考えるかの違いであるとも言える。特定された語り手の対話であるのか、それとも、語り手を特に限定することなく、既に始まっている対話の只中へと参加するかの違いであると形容してもいい。予めそれらへの関心の強度のどちらが勝るとは特定することができない。ただ、その場に置かれた状況によって選り好みをする問題である。この選り好みの仕方にくらか幅を持たせるのが言語の役割である。予め所有している知識や経験を基礎にして分別をする言葉。一方、身体は言葉よりも円滑に、欲求に対して素直に分別するのだけれども誠に動物的であって悪意がない。不快さにも似た違和を伴わない限り、身体は言語のする表現に対して盲目的なのである。物事と私の距離は欠如する。分からなさは欠如する。そもそも思考さえも始めることはできないのだ。考えないことで、世界や他者の立場は保証されたままである。その保証されたままである世界を幾らか傾けることで、見えるようにするのが表現である。これはなにも芸術家に限ることもなく人間の作法である。くれぐれも、保証された世界を悪とみなそうとするわけではない。変化の無い世界があつてこそ、傾きがあるわけだ。そもそも、この傾きさえも必然ではないのかもしれない。これは、およそ、私ばかりを反復する世界に倦怠を感じているかいないかの問題なのかもしれない。そうであるならば、身体は刺激に飢えるのではなく、代わり映えのない反応の仕方にこそ飽きを覚えているのではないか。変化は既に見えようとしている。刺激は常に与えられている。それをいつしか忘れてしまうのだ。

自作は何者であるか、何を表現している作品なのか、それを指し示すような記号（サイン）は根こそいで削ってしまい、ものよりも外側に追いやっていくつもりである。本来とでも形容してよろしいのであれば、本来の芸術家のすべき表現、立場、視点こそを敢えて削っているのである。この行いは、どちらかと言えば、作品をつくるというよりも素材を現すことに近い。そうして表現の皮切りを目前にしながらも、自ら（みずから、おのずから）の身体を場から退かせることに狙いがある。つくること、表現することへの戸惑いは、一向に主体も客体も、ハッキリとはしてこないだろう。何者が表現しようとしている犯人なのかさえも。むしろ、ハッキリとしているのは、まるで観者を煙に巻こうとしている詐欺師のような態度の方ではある。この何も表現をしないかのような振る舞いを、例えば、ナンセンス（無意味）な行いであるか、ないか、といった区別をすることにさえ、僕自身は躊躇している。むしろ、そういった区別、言語化がなされようとする以前へと、関心は遡っている。それは差し詰め、問いではなく、むしろ、問いが今、まさに生まれる瞬間を待望するかのようだ。必ずしも、芸術家が率先して真理を表さなければいけないなんてお約束はない。必ずしも先導者として手を引く必然もない。むしろ僕は真理を分からなさを境にして拒絶しているのだ。分からなさは、私にとっての他者の奥行きである。

僕にとっての芸術とは、他者理解のために付随する技術である。それは良くも悪くも人の生を間延びさせる手段に過ぎない。それはまるで虚構が加担をするかのようでもある。直接的に世界を変えることなく出て来るはずがない、私が他者の身体にでも成らない限り。世界の解釈は偶然にして自発的に訪れる。確信の足りない不安の中においても、分かりすぎたはいけない。私はきつと頼りなくとも自由な態度を望んでいる。表現しなければいけないことは何か